

ベッドサイドに置いたスマートフォンからピピピピ……、とアラームが繰り返されている。まだぼんやりとした意識の中で、虎杖悠仁は布団の中から腕を伸ばしてアラームを止めようとした。

あれ……？ スマホ……どこ？

伸ばした手がスマートフォンを見つけれられないというより、腕が伸びない。もしかしたら寝ぼけてスマートフォンを床に落としたのかもしれない。そう思った悠仁は、臉を持ち上げて布団を捲ろうとした。けれども予想していた行動が出来ない。

んん？ 何か体変だな……？

疑問を抱きながら目覚めた悠仁は、己の手を見て言葉にならない叫び声を上げた。

「ぬくくくくくっ!!」

いくら伸ばしても伸びない腕……手が、ぽふぽふと布団を叩く。そして、ちまい。虎杖悠仁であ

るはずの体がつつてもちいこい。

「ぬ？ ぬぬ？」

なぜか語彙が『ぬ』である。さてはて、これは一体どういう事だろうか。もしかして夢かもしれない。そう考えた悠仁は目を閉じて……みたが、閉じられない。いや、閉じたという気持ちにはなつた。実際に意識の中では閉じている。どうやら表面の目が閉じない。そして腕が短すぎて顔に触れない。

え？ 俺の体どうなってるの？ ちっこくてやばくね？

混乱が治まらない。けれど、どうやらジタバタと小刻みには動くようで、布団の中でモゾモゾ体を動かしてようやくベッドから出る事が出来た。否、ころころんと転げ落ちた。

いてて……。

受け身など取れるわけもなく大の字で床に落ち